

「保護者と協働し、一貫した指導を」

北海道札幌伏見支援学校 道添範大

1 はじめに

教師は、子どものもつ可能性を最大限に引き出し、社会の中で自立した生活を育むことができる教育をすることが役割であり、障がいの状況に関わらず、多くの社会経験と人との出会いを通して、いろいろなことに挑戦し、その経験を生かしながら自分の人生に自分で関わろうとすることができる力を身に付けることだと思っています。

自分が担任、そして、特別支援教育コーディネーターとしての経験において感じたことは、子どもたちの行動や能力は、その良し悪しに関わらず、日々の学習の繰り返しにより、本人の強みにも弱みにもなり、それが日常生活や社会生活に現れ、やえもすれば、その行動や能力は「障がい」によるものだと誤った理解となり、子ども自身の社会自立への可能性を狭めてしまうことです。さらに、子どもに関わる大人の発言や導き方によっては、子ども自身の大切な意思決定の機会を奪いかねないということです。こうしたことを考えながら、自分の子どもの見方や考え方、それに伴う実践が、正しいのか、無理強いなのか、を深く考えるようになりました。

2 子どもを理解する

子どもたちの表面的な行動などに注目しては、子どもの可能性を引き出すという目標を見失うことにつながりかねません。なぜなら、知的障がいや自閉症のある子どもたちが抱える困難さは、一つのことが理由だけでなく、複合的に重なって障壁になっているからです。だからこそ、正しい理解に伴った一人一人の実態把握がとても大切だと考えています。そのために、専門機関での研修会に数多く出席し、脳科学や心理学、感覚統合など専門的分野について研修を深めました。そして、これらの研修で出会った人とのつながりの中で、多くのことを学ぶことができました。今は、そこでの学びを根拠として、アセスメントを行い、それを指導に生かすだけでなく、保護者とも共有することを重視しています。

3 共通目的をもって、教え導く

私たちは、担任として関われる時間は、限られています。そこでの教育は、その子ども一部を抜き出して指導や支援をしているだけになってしまうことがあります。将来の目標に向かって一貫性や継続性の指導や支援を行うためには、担任間の引継ぎだけでなく、子どものニーズを一番理解している保護者がどのように子どもの教育や支援に関われるようにするのかを考えることが重要と感じています。子どもの将来の生活（ライフステージ）を想定する場合においては、家庭や地域での生活の様子から何を教えるべきことなのかを知ることや、学習したことや経験したことが確実に定着できるように、家庭を軸にした協力体制を構築することを意識してきました。担任だからできるのではなくて、保護者にもできるとい

う視点で、授業の様子を見学する機会を多く設ける中で、子どもの良さだけでなく、日々の生活における難しさや、うまく学べない背景にある特性、性格などの学び方の特徴（学習スタイル）を伝える努力をしてきました。そのことによって、家庭や地域において、その学習スタイルを生かし環境を整えることができるようになり、総合的にアプローチができました。特に、自主通学に向けては、バス会社に保護者と一緒に出向き、子どものプロフィールを基に支援の協力を得ることや、将来、働くことへの意欲や動機付けを高めることができるように、企業の協力の元で就労体験などを行いながら、働いて報酬を得て、その報酬で生活（余暇充実）を組み立てるなど、将来を見据えたキャリア教育につなげることもできました。

5 まとめ

子どもへの指導や支援が、対症的なのか、予防的なのか、どの立場になっているのかで、大きな違いがあると感じています。今、起こっている事象に対して、支援会議などで検討をすることも大事なことであると思いますが、その前に、将来の夢や願いなどを具体的な目標として話し合っているのかということは、さらに重要なことだと考えています。子どもが「〇〇したい。」という意思決定ができたのであれば、夢を叶えるためのプロセスを自分で見付けることが難しい子どもたちのために、達成までプロセスを明らかにし、周りの人が支援を行いながら目標を達成することが大切だと思います。

今後も保護者と協働し、一貫性と継続性のある教育につながる教育実践を積み重ねていきたいと考えています。